

CHieru Magazine

高校・大学版

2024

秋冬号

学校教育現場のICT活性化マガジン

スペシャル・インタビュー!

高等学校編

文部科学省 初等中等教育局
参事官(高等学校担当) 田中 義恭 氏

「DXハイスクール」は ICT整備を起点とした“高等学校改革”

スペシャル・インタビュー!

大学編

法政大学 教育開発支援機構長
社会連携教育センター長 生命科学部 山本 兼由 教授

教学DXによる授業・学習支援で 「自由を生き抜く実践知」の具現化を推進

CHieru
チエル 株式会社

高等学校
編

M02

スペシャル・インタビュー!

文部科学省 初等中等教育局 参事官 (高等学校担当)

田中 義恭 氏

「DXハイスクール」は
ICT整備を起点とした“高等学校改革”

M06

情報教育の実践

|山梨県| やまなし情報教育推進室

独自カリキュラム「やまなしメソッド」で
小・中・高・大の校種間連携を深める

M08

導入事例 InterCLASS® Cloud

|高知県| 高知県立岡豊高等学校 教育センター分室(遠隔授業配信センター)

生徒が一人でも授業を開講
遠隔授業の先進的な取り組み

M10

導入事例 CaLabo® LX / S600-OP

|島根県| 島根県教育庁 教育施設課

利用者目線の扱いやすい操作パネルで
PC教室のアップデートを推進

M12

導入事例 Tbridge®

|福井県| 福井県教育庁 教育政策課

GIGAは「つながるネットワーク」が前提
モニタリングでトラブル原因を特定する

大学
編

M14

スペシャル・インタビュー!

法政大学 教育開発支援機構長

社会連携教育センター長 生命科学部

山本 兼由 教授

教学DXによる授業・学習支援で
「自由を生き抜く実践知」の具現化を推進

M18

導入事例 CaLabo® LX / S600-OP / GLEXA

|長野県| 長野県立大学

BYOD時代のPC教室の意義
質の高い教育は安定的な環境から

M20

導入事例 CaLabo® MX

|東京都| 中央大学

教員・事務室・チエルの“三位一体”で
より良いシステムの実現へ



定期配送のお申し込み

年2回

「チエルマガジン」を無料でお届けします。

毎年4月と9-10月に発行される「チエルマガジン」は
「小学校・中学校版」と「高校・大学版」
がございます。

定期配送をご希望の方は、WEBからお申し込み
ください。年2回、無料でお届けします。

バックナンバーもこちらから。



【チエル・マガジン2024秋冬号】

2024年9月17日発行

発行人

粟田 輝

制作ディレクター

横山 英一

ライター

垣内 真梨子 (株式会社エディト)

柴田 哲也 (株式会社エディト)

佐々木 恵理 (株式会社エディト)

杉浦 直洋 (株式会社エディト)

熱田 愛弥 (株式会社エディト)

譽田 洋斗 (株式会社エディト)

デザイナー

タカキ 絵美

上條 美樹

(チエルコミュニケーションブリッジ株式会社)

滝田 祐治

(チエルコミュニケーションブリッジ株式会社)

田浦 裕朗 (株式会社エディト)

カタログ表紙イラスト

小林 賀子

印刷・製本

株式会社広英社

【発行】

チエル株式会社

〒140-0002 東京都品川区東品川2-2-24

天王洲セントラルタワー22F

TEL 03-6712-9721

※本誌記載の記事、写真などの無断転載を禁じます。

※本誌でご紹介させていただいた方々の所属・役職は
2024年8月1日現在のものです。



中央大学

〒192-0393 東京都八王子市東中野 742-1

1885年に「英吉利法律学校」として創設され、建学の精神「實地應用ノ素ヲ養フ」のもと、実社会が求める人材を育成する実学教育を特徴としている。長い歴史と伝統を受け継ぎながら、時代の変化に対応した学修環境へと進化を続けている。



学事部教務総合事務室・教育力研究開発機構・映像言語メディアラボ 担当課長
西條 貴陽氏



学事部教務総合事務室・映像言語メディアラボ・教育力研究開発機構 担当課長
児玉 純一氏



経済学部 准教授
大羽 良先生



導入事例



教員・事務室・チエルの“三位一体”でより良いシステムの実現へ

東京都 | 中央大学

中央大学では、新型コロナウイルス禍に世間が揺れていた2022年度から、講義形態の「ニューノーマル化」や複数キャンパスを有する体制への対応の一環として、『CaLabo® MX』を導入した。同大学の英語学習で『CaLabo® MX』がどのように活用されているのか、そして同大学で進む『CaLabo® MX』の活用拡大への支援体制などについて、語学の講義を担当する教員と学事部教務総合事務室の双方に話をうかがった。

導入製品 | 語学学習支援システム
CaLabo® MX (詳細はP8へ)

生がハードルをあまり感じずに利用できる点が魅力だと思います。特に音声の再生に関して、音の波形を見て自分の聞きたい部分をピンポイントでリピートしたり、再生速度の変更が簡単にできたりする点は、リスニングに不慣れた学生には嬉しいでしょう」と語る。

『CaLabo® MX』にはさまざまな特徴があるが、「学生にはなるべくいろいろな、生きた英語の実例に触れさせたい」と語る大羽先生が重視しているのが、オンラインの動画や文章といった英語コンテンツをアップロードし、リスニングやディクテーションの練習に使える教材に仕立てられる点だ。冒頭のクイズを始め、リスニング練習やディクテーションの教材を作る際、「音声データをテキスト化するのが簡単で、教材づくりの手間がかなり軽減されました」(大羽先生)

なお世の中にはさまざまな英語のテキストコンテンツがあるが、教育に利用する際に音声として学生に提供したいこともある。こうした時、入力したテキストを基に自動音声でリスニング教材を生成する『CaLabo® MX』の機能が重宝すると大羽先生は強調する。「かつては教科書付属の音声データしか使えなかったが、教材は非常に限られた

ものでした。『CaLabo® MX』では、人間の発声に近い音声を自動生成してくれるので、助かっています」

万全のサポート体制がシステム普及の土台になる

この事例のように、『CaLabo® MX』の活用で教員の業務負担を改善し、学生の学習意欲を向上させられる点には、中央大学も期待を寄せる。同大学ではコロナ禍の影響や法学部のキャンパス移転に伴い、語学教室のCALL環境を見直したタイミングで、『CaLabo® MX』を導入していた。普及はこれからが勝負になる。そこで現在、学事部教務総合事務室(以下、同事務室)が音頭を取り、『CaLabo® MX』の普及および活用を全学的に促進しようとして働きかけを行っている。

例えば2023年度には、学内の教員向けに同システムの説明会を開催。また既にユーザーである教員に向けては、学内のポータルサイトを通じて、システム概要や利用できる機能について情報を提供している。そうした中、『CaLabo® MX』を利用する教員へのきめ細かなサポートが、非常に重要になります」と語るのは同事務室の担当課長児玉純一氏だ。文系学部に所属する語学教員には授業でのICT活用

の経験を持たなかったり、苦手意識があったりするケースが多く、操作が分からなかったりバグが発生したりすると、利用を諦めてしまう恐れがあるからだ。

そこで同事務室のスタッフは、『CaLabo® MX』の利用に関して、質問や相談をメール・電話で受け付ける体制を整備。事務室スタッフで解決できる問題については自分たちで対応し、学内で解決できない技術的な問題はチエルのサポートスタッフと連携し、迅速かつ確実にフィードバックを行う仕組みを構築している。児玉氏は、「迅速な対応への感謝や、要望がシステムのアップデートにつながるがありがたいとの声が寄せられています。またチエルのサポートスタッフも、なんでもサポートしてくれる」というユーザーの安心感につながっていると考えます」と話す。

今後、同事務室はさらなる活用を視野に入れて取り組みを進める。同事務室の西條貴陽氏によれば、ユースケースの共有がその一つだ。「授業に『CaLabo® MX』を取り入れ、講義進行の効率化、業務負担軽減に貢献した好事例を共有することで、他の教員の有効活用につながるねらいがあります」。また西條

「多くの英語に触れさせたい」を教材づくりの効率化で実現

「英文を読む、あるいは聞いて意味が分かって終わりでは、英語を使ったことにはなりません。英語から得られる情報についてどう考えるか、どのようを使うかが社会に出てから本当に必要となることではないでしょうか。それを英語が苦手な学生に感じてもらう第一歩として、英語の内容を理解し、考えて、調べる必要のあるクイズを出しています」。

こう語るのは、中央大学経済学部で、英語に苦手意識を持つ学生向けの基礎英語の講義を担当する大羽良准教授だ。

学生が挑戦するのは米国の小学生向けの教育クイズで、Which abbreviation for a day of the week is a noun and can be a verb too? などの質問を、読むか聞いて、考えて、調べて、そして回答する。「英文読解やリスニングが苦手な学生でも、無味乾燥に英文を読ませるよりも、興味を引く、積極性を引き出せます」と大羽先生は工夫を明かす。

この時使っているのが、語学4技能の学習を支援するクラウド型MALLシステム『CaLabo® MX』(キヤラボ エムエックス)の小テスト機能だ。大羽先生は、「同システムはビジュアルや操作性が良く、学

氏は、動画や音声などのデジタルコンテンツを簡単に教材にできる『CaLabo® MX』の利点をさらに生かしてもらおうと、「これまで中央大学がDVDなどのハードで所蔵していた視聴覚資料から、オンデマンドコンテンツを重視するシステムへの移行を加速し、教員に周知していくつもりです」と明かす。

中央大学は、事務室・教員が今後、チエルの連携をいっそう深化させることにも意欲を示す。「売ったらそれで終わり」というシステムが多い中で、導入後もチエルと密に連携できる環境がある点が良いことだと思えます。教育現場の意見・要望にメーカーがすぐに反応してくれるれば、教員・学生が効果的に使える機能がいろいろ充実するでしょう」との大羽先生の言葉に、同事務室の児玉氏、西條氏も力強く頷いた。



『CaLabo® MX』の概要・使い方を紹介する中央大学のポータルサイト。